

第2章 Summer Project (サマープロジェクト)

例年であれば、Summer Project は、「3年生のリーダーシップのもと、異学年協働による、学校祭成功に向けたプロジェクト」ということで、特別活動に力点を置いた取組を行っている。昨年度では、連合音楽会も学校祭の成功に向けたプロジェクトの一環として取り組んでいたが、今年度はコロナウイルスの関係で連合音楽会に不参加となったこと、始業が6月からということ、昨年度 Autumn Project で取り組んでいた学年プロジェクトが通年での実施となったことなどから、Summer Project は学年プロジェクトと並行する形で、学校祭に注力して行われることとなった。

また、昨年度までと異なり、今年度は企画の段階から生徒主体で取り組んだ。どういった目的で、どのような部門をいくつ作り、当日までの準備のスケジュールから、当日のタイムテーブルまで、ゼロから創り上げた。もちろん、コロナウイルスの影響から例年と異なる点もたくさんあり、規模縮小となったこと、食品提供や密になるお化け屋敷といった部門が実施不可になったこと、感染症対策を考慮した内容でなければならないことなど、生徒は今までの取組で参考にできないこともたくさんある中で企画していくこととなった。

1 目的から考える

今年度、ゼロから生徒主体で学校祭を創り上げるということで、生徒代表(執行部)と教員代表(学校祭実行委員会)との会議を6月始業時から始めていった。大事にしたのは、「何をするか」ではなく、「なぜするか」である。この時、執行部の3年生は、「飛躍の会」を抱えており、余裕のない状態でもあったので、なかなか先に進んでいかなかった。高いレベルを求める教師側に対しフラストレーションをためている時期でもあった。「飛躍の会」が終わり、達成感を感じた3年生は学校祭でも同様の思いをしたいと考え、学校祭の目的が以下のようにまとまった。

- ① 見る人を意識し、思いや意図が伝わるものをつくる力をつける。
→ やる側の自己満足にならないようにする。
- ② 全員で成し遂げる力をつける。特にリーダーは計画力と統率力をつける。
→ 手持ちぶさたな人がいないようにする。

また、「飛躍の会」の経験から、当日に観客がいる前でのパフォーマンスを前提とした部門づくりを行うことになった。例えば、お化け屋敷の代わりにホラムービーを撮影して体育館で上映するという案もあったが、当日は上映するのみの活動になることから見送られた。また、体育祭の色別看板については、部門長が簡単に説明するだけだったものを、制作に携わった全員がパフォーマンスをするように変えた。

この目的に沿って、学校祭のテーマが「∞~1人1人がスターになれ!~」となった。このように目的を定める時間を大切にすることで、迷いが生じたときに目的に立ち返る場面もあり、一貫した取組になったと思う。



2 感染症対策と全校合唱

テーマが決まり、「1+1 が 2 ではなく、∞になる」学校祭にしたいと考え、全校合唱を企画することとなった。各部門では力を合わせていくことになるが、全校で力を合わせるといふ場面が前頁の学校祭看板だけだったので、他の取組もしたいと考え、実現に向けて動くことになった。合唱になった理由としては、連合音楽会が中止になったこともあるが、学校祭テーマとの親和性が高いことも挙げられる。1人1人の出す音が重なり、ハーモニーとなって感動を生むからである。

こういった活動をしていく中で感染症対策は切っても切り離すことができないが、「コロナウイルスだからできない」ではなく、「どうしたらできるか」といった発想で企画をすることができた。こういった発想が生徒側から自然に生まれるのは、これまでの様々なプロジェクト学習があるからだと考える。体育祭でも同様に、ソーシャルディスタンスを生かした競技を考えることができた。



3 成果と次年度に向けた課題

上述したような濃密な取組だったからこそ、執行部の3年生は感想を書く際、1枚では足りず、裏面も使うほどだった。「全員がスターになる」ことをテーマに掲げたことで、「3年生の」学校祭ではなく、「全校の」学校祭になった。前面に出る3年生もいれば、裏方に回る3年生もいて、たくさんの下級生がステージで輝いた。ここでの執行部の「目的・目標を明確にする」という学びと、「全員がスターになる」というスタンスはその後の様々な活動に伝播し、安居中学校の学びを更に深める原動力になったと考える。生徒に限らず、一緒に学校祭を創っていった教師自身が大きく影響を受けたことも大きい。

次年度に向けた課題としては、今年度より余裕のある活動ができるため、学校祭を軸にしながらも、異学年交流による特別活動を豊富に混ぜ込んで、計画的でロングスパンの取組になるようにしていくことである。Summer Project 3年目となり、2年間の経験を生かしての本格実施になるので、生徒と共に良いものを創り上げたい。その際、カギになるのは教師側のスタンス・目的・方法等の共有である。前述した通り、執行部は教師との会議を重ねてフラストレーションを感じながら、最終的にはその議論の重要性に気づいていったが、生徒が変われば方法も変わる。誰がどのようなスタンスで生徒と関わり、共に創る活動にしていくかは吟味する必要があると考える。

(文責 竹内 恭平)